

水族館へ行こう!

60

白山 義久

京都大学白浜水族館

白浜水族館では、いつもアワビの仲間を展示している。地方名で「流れ子」と呼ばれる特異な種類もいて、トコブシという和名が付いている。

アワビの仲間は殻に4、5個の穴が開いているが、トコブシには6、8個の穴があって区別できる。成長に伴って殻の外側に新しい穴が

できるが、古い穴が埋まるので開いている穴の数はいつも一定である。

この穴は排せつ物を外に出したり、生殖口として使ったりする。

「流れ子」と呼ばれるアワビの仲間

つまり雄の精子と雌の卵子がこの穴から海水中に放出され受精する。受精卵は成長して幼生となり、海水中を漂って時期が来ると海底に降りて変態して稚貝になる。その後、アワビの間は長生きすれば20年以上にまで成長するが、トコブシはせいぜい10ヶ月くらいまでしか大きくならない。

アワビ類の幼生が海底に降りるのは、表面が石灰藻という藻類に覆われている所だけだ。磯の表面に泥が積もっているような所では、幼生は決して変態しない。着底しても泥に埋もれて死んでしまう。だから清浄な海にしかアワビは育たない。



△「流れ子」と呼ばれる「トコブシ」(水槽番号005)

トコブシは足を使ってガラスにくっついていて、この筋肉質の足が

日本人にとって、単なる食料だけでなく文化的にも深くかかわりを持ってきたアワビ類だが、近年、環境汚染と乱獲がたまたま激減している。資源を回復させるには、漁業者と研究者が協力して環境を整え漁獲量を調整するとともに、密漁を根絶することが必要だ。

(京都大学瀬戸臨海実験所長)